

# 「盲ろう者」として自分らしく生きる ～私にとって障害・仕事・支援とは～

中 條 與 子 (Nakajoh Yohko)

## 第2回 同じ空間にいた友人の言葉から、 「点」と「線」を結びなおす。

### 私の日常① 誕生日を祝う

#### 1. はじめに

今号から次の3つのテーマ、

1. 私の障害について
2. 障害と仕事
3. 支援をうけるものとして

の「1. 私の障害について」から開始予定だったが、完成していないことをお詫びしたい。

今回は「私の日常」を書く。今後の連載にも、「私の日常」コーナーを併設して登場させたい。

#### 2. 私の日常① 誕生日を祝う

友人と久しぶりに再会。数年違いで天神祭奉納花火の日に生まれた者同士、誕生日が近かつ

たので、一緒に美味しいものを食べる事に決定。共通の知人に教わったイタリアのお店で、お互いの近況と、ひと皿ごとにいろいろな味を楽しんだ。料理が終わると、頼んだコーヒと一緒にデザートが運ばれてきた。白いお皿のまわりにチョコで“Happy Birth Day!!”とデコレーション。友人が予約の際に、特別にリクエストしてくれたようだ。私が予約をしていたら、こんな嬉しいケーキに出会えない。

ケーキを食べ終わると、友人がもう私たちしかいない事を教えてくれる。振り返ると、1組が会計を終えて去ろうとしていた。客は私たちだけ。話を聴いて喋りながら、料理を食べていると、私の視線は一緒に食べている友人の口や目元、口に運ぶ料理で、狭い視野がいっぱいになり、周囲の存在を忘れてしまった。友人から状況を教わらなかったら、私の「KYちゃん」度が更に力強く発揮したに違いない。

いそいそと私たちは会計をすませると、友人

が手引きは大丈夫かと訊ねてくれた。行きは夕暮れでまだ見えるので断ったが、玄関の方向を見るとガラス張りの向こうは、暗闇の中にポツポツと光がある。私は網膜色素変性症の症状の一つ、夜盲のため、夜や暗闇が見えない。お言葉に甘えて、手引きをお願いした。側にある友人の右肘を左手で持ち、半歩ほど下がって歩き始めた。

お店を出ると、夜風もない、蒸し暑いお風呂のような空気をあびる。しかし、私たちは美味しい時間の余韻に浸る。何が一番好きな味だったか、報告し合う。

友人は料理が美味しいだけでなく、お店の雰囲気もとても良かったと、ため息のような声で語る。それを聞いて、お店の場所は、大きな湖がある県で少し遠いことが気がかりだったが、喜んでくれて安心した。

予約して良かったと、友人は話を続けた。私たちが入店してしばらくすると、すぐに満席になったそうだ。玄関には席が空くのを待つ客たち、諦めて店を後にした客もいたそうだ。そういえば、共通の知人から、予約した方がよいと言われたことを思い出した。

私たちの隣にいた客のことも、教えてくれた。予約なしで入店した客だそうで、注文した料理がなかなかこなかったようだ。なんとなく、男

女のカップルがいたような気がするが、私からは、楽しんでいるように感じたので、想像とは違った状況のようだ。

あと、小さな子供と一緒に家族連れが多かったとの事だった。確かにトイレに行く時、テーブルとテーブルの間を歩いていくと、小さい子供が目に入り、子供の元気な高い声が聞こえた気がする。背丈が低い子供は、私の視野の中に見えることが少なく、下手すると蹴飛ばす可能性がある。注意深く歩く事に気を取られて、それ以上の感想は持たなかった。

友人と同じ空間にいて、イタリアンを食べて、喋り、楽しんだ。友人の言葉から、私の感じていたお店の印象とは違った。一瞬一瞬の目の前で起こっている「点」は、見えて、聞こえているかもしれないが、点と点を結ぶ「線」までは気づきにくい気がした。私が妄想で線を引いているかもしれない。

共通の知人には、料理が美味しかったこと、友人が喜んでいて、サプライズのケーキを伝えるつもりだった。それに加えて、友人の言葉から点の記憶が線になった、お店が満席だったこと、予約して良かったこと、子供の家族連れが多かったこと等、一人では「点」のまま出てこなかった、お店の雰囲気などの感想とともに伝えた。

